

ミニバレーの国際化による幼児・障がい者への普及 ～ロシア・サハリン州の事例をもとに～

著者	侘美 俊輔
雑誌名	稚内北星学園大学紀要
号	20
ページ	41-63
発行年	2019-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1079/00000439/

ミニバレーの国際化による幼児・障がい者への普及 ～ロシア・サハリン州の事例をもとに～

侘美 俊輔

● 要約

1972年に北海道大樹町で考案されたミニバレーは、北海道内各地で親しまれている「ニューススポーツ」の1つである。ミニバレーは、誕生から40年余りが経過し、現在は世界40か国以上に普及され、とりわけロシア全土で急速に愛好者が拡大している。

そこで、本稿の目的はミニバレーの国際化、とりわけロシア・サハリン州における幼児や、障がい者への普及の過程を確認するとともに、今後のさらなる国際化の可能性について探ることとする。北海道大樹町発の「ニューススポーツ」が、海外では北海道や日本国内の普及展開とは異なる位相で拡大しつつある。現時点において、ミニバレー普及の国際化を時系列かつ即時的に整理することが、今後ニューススポーツとして普及・拡大するうえでの貴重な資料となることが予想される。

● キーワード

ミニバレー

幼児

障がい者

サハリン

ニューススポーツ

はじめに

ミニバレーは、1972年に北海道広尾郡大樹町の小島秀俊氏（現：一般社団法人全日本ミニバレー協会理事長、当時、大樹町教育委員会社会教育係職員；以下、小島氏とする）によって考案された「ニュースポーツ」である。以下では、「ニュースポーツ」に関する先行研究の整理、ミニバレー誕生の経緯、ミニバレーの国際化について言及する。

第1に、先行研究をもとに「ニュースポーツ」の定義や、北海道におけるニュースポーツ誕生の背景についてである。仲野（2006）は、「ニュースポーツ」を「競技力・体力・老若男女を問わず、あらゆる人々に開かれ親しみやすさを含んだ新しい概念のスポーツ」と述べている。また、「ニュースポーツ」は、競技性を強調する「競技スポーツ」に対するカウンターカルチャー（対抗文化）として発生し、「いつでも、どこでも、誰とでも」といった全ての人に開かれたものとして普遍性を協調しながら発展している。野々宮（1993）によると、「ニュースポーツ」誕生の仕組みは「①創造・開発・開拓・拡大によるもの、②コラージュ（貼り合わせ）によるもの、③ダウンサイジング（軽簿短小化）によるもの」であり、今日の「ニュースポーツ」の多くは、競技性の面からいわば完成品である既存のスポーツを、時代的ニーズや個々人のニーズに沿うようにコラージュしたり、ダウンサイジングしたものである。北海道では、これまでに芽室町のゲートボール（1947）、大樹町のミニバレー（1972）、幕別町のパークゴルフ（1983）など多くの「ニュースポーツ」が誕生してきたが、このような背景には、地方の市町村における人口の減少、産業の停滞、過疎、高齢化など深刻な問題状況が現れ、とりわけ農村部においては、過疎化によるスポーツの担い手そのものの流出という厳しい現実があったからである（笹瀬，1992）。このような北海道におけるゲートボール、ミニバレー、パークゴルフなどの「ニュースポーツ」の創造を、「スポーツ振興の困難との背中合わせでの工夫」（笹瀬，1992）と指摘する。

第2に、ミニバレーが誕生した経緯と組織化についてである。1972年は、急激な社会構造の変化の時代であった。1971年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について」、中央教育審議会「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について（答申）」や、1972年の「保健体育審議会答申」などの政策的影響を受け、全国的に「スポーツの生活化」が叫ばれ、全国各地で社会体育の振興に取り組む契機となった。1964年の東京五輪にて「東洋の魔女」と言われた女子バレーが金メダルを獲得し、その影響で人気種目の1つとなっていた時代であった。その後、政策的に「コミュニティ・スポーツ」が提唱され、「スポーツの生活化」を目指すプログラムの1つとして「ママさんバレー」が普及された。小島氏も、大樹町が主催するスポーツ教室の中で、毎週40～50名ほどの主婦を相手に「ママさんバレー」の指導を行っていた。ところが、徐々に受講生が減りだし、2ヶ月も過ぎたころには半分以上になった。その理由は「手や指が痛い」、「ボールが怖い」といった「ママさんバレー」のボールに対する不満や恐怖感からであった。そこで、小島氏は、友人が持っていたS社（化粧品会社）の宣伝用ビーチボールと、バドミントンのネットやコートをもそのまま活用し、ひと工夫することで面白いゲームができるのではないかという予測のもと、幾度かの試行錯誤を重ね、ゲームとしての体裁を整えた。このような経緯をたどり、1972年の秋に「ミニバレー」は誕生した。小島氏によると、ミニバレーは「スポーツをしたいと願いながら取り組めないでいる人々に、気軽にしかも楽しくスポーツをさせるためにはどうしたらよいのか」という発想を原

点に生まれ育ったスポーツ」(小島, 1982)である。さらに同氏は「大樹町をはじめとする北海道の大部分では、冬期間の運動量がどうしても減少してしまいがちになるため、ミニバレーを冬場の『健康スポーツ』として位置づけたかった」とも述懐する。

ミニバレー誕生当時、その人気は爆発的なものがあつたが、大樹町教育委員会では協会組織を作ることに慎重だった。その理由は「協会が出来ることによって競技志向が強くなり、生涯スポーツ、大衆スポーツとしての良さが忘れられることを危惧したから」である。しかし、各地で行なわれ始めた類似のゲームの中には、ネットの高さが1.80 mや2 mと高くなっていたり、ボールが硬く重いものになっているものも見られた。そこで、1985年に「大樹町ミニバレー協会」を設立し、ルールや用具(ボール)の統一を行った。1988年には、全国的な大会の1つとして第1回「ミニバレー ジャパンカップ」を大樹町で開催した。その後、統一ルールを記した「オフィシャル・ミニバレー・ルールブック」(全日本ミニバレー協会, 2004)を発行した。その1ページ目には、以下のような記述がある。

ミニバレーはであいを楽しむスポーツです。ミニバレーはふれあいを深めるスポーツです。そして、ミニバレーは喜びも苦労もみんなでわかちあって創り上げるスポーツです。ミニバレーを愛好するすべての人はこの精神を尊重しながら楽しんでください。

この『であい・ふれあい・わかちあい』という3つのスローガンは、「(ミニバレーを)単にスポーツ・ゲームとして楽しむだけではなく、ミニバレーを通じたスポーツとのであい、人や地域とのふれあいを大切に、ミニバレーを通して得られる喜びや感動、苦労を仲間とともにわかちあうミニバレーでありたい」という願いが込められている。現在、このルールブックは、英語、中国語、ロシア語に翻訳されている。

第3にミニバレーの国際化についてである。21世紀以降、ミニバレーによる「であい、ふれあい、わかちあい」の精神は、国境を越えて広がりつつある。現在では、40か国以上でミニバレーを通じた国際交流が実施されている(写真1)。そのきっかけの1つは、2002年に北海道大学において、北海道、ロシア極東地域、中国東北部、韓国の研究者たちによる「北東ユーラシア地域健康・体育・スポーツ会議」が開催され、それぞれの地域から、寒冷環境を克服し、身体活動、健康増進を通して地域発展を目指す研究成果が発表された。この会議において、小島氏により日本におけるミニバレーの発展とその健康づくりの効果が発表された。

参加者の中で、特にこの発表に大きな刺激を受けたのがサハリン国立総合大学のパシュコフ(Пасюков)教授である。ロシア・サハリン州では、パシュコフ教授が中心となり、2003年にサハリンで初のミニバレー大会が開催された。2006年10月には、小島氏ら6名の北海道内愛好者がユジノサハリンスクでの国際交流大会に参加し、以後相互交流を継続的に実施している(不定期)。2017年にはサハリン州バレーボール協会との交流開始15周年、協力協定締結5周年を迎えた。

近年、ロシアにおけるミニバレーの普及は、さらに拡大している。パシュコフ教授が自身の学術ネットワークを駆使した結果、ブリヤート(バイカルカップ:ウランウデにて)、ウラジミール(ゴールデンリング(黄金の輪)・ミニバレー・トーナメント:ウラジミール大学)、ソチ(ソチオープントーナメント)などロシア全土に普及しつつある。このソチで開催された大会には、小島氏をはじめ日本

からの男女各1チームずつの選手団も参加し、交流を深めた。2017年ソチで開催された「社会主義国におけるユニバーシアード」とも言われる「世界青年学生祭典（World Festival of Youth and Students）」において、ミニバレーが公開競技として実施された。この「世界青年学生祭典」においてミニバレーが実施された背景には、ミニバレージャパンカップに招聘、参加したロシア人たちによる尽力があった。

さらに、ロシアにおける特徴的なことは、幼児や障がい者へのミニバレーの普及である。2012年から2017年の5年間にわたり『友情のボールプロジェクト』が展開された。2017年にはパシュコフ教授により、その成果発表会が企画された。さらに2018年には、パシュコフ教授によって教科指導書本である「Физическая культура. Мини волейбол」（筆者による英訳：physical culture Mini-Volleyball）が執筆され、その学術成果がまとめられた。



写真1：ミニバレー国際交流マップ（ミニバレージャパンカップ2018 in 札幌において撮影）

上述したように、ミニバレーは黎明期において、大人、とりわけ農閑期を中心に普及、拡大したものであった。今日では、北海道内において、ミニバレーは、学校体育、スポーツ行事、PTA活動、職場のレクリエーションなどで実施されている。ミニバレーの知名度は、北海道内において一定程度浸透してきているものと推察される。しかしながら、その研究成果の蓄積は十分とは言えない。侘美（2003）や、堀内（2007）による運動生理学、健康科学的な研究や、長屋ら（1987）による社会調査の結果は報告されているものの、ミニバレーの歴史性、国際化などに焦点を当てた社会科学的な研究蓄積はほとんど見られない。

以上を踏まえ、本稿では北海道で発祥したミニバレーが、ロシア・サハリン州を中心に、ロシア全土に普及が拡大している第3の事実に注目する。さらにロシアにおいては、幼児、障がい者の大会や、幼稚園の授業に取り入れられるなど、日本とは異なる普及がなされている事実にも着目する。筆者は、2017年10月にロシア・サハリン州、ユジノサハリンスク市を中心にフィールドワークを実施した。

筆者は、全日本ミニバレー協会による「協力協定締結 5 周年記念事業」に帯同し、学術シンポジウム、現地住民とのミニバレーの試合、その他の文化交流などに参加した。

そこで、本稿の目的はミニバレーの国際化、とりわけロシア・サハリン州における幼児や、障がい者への普及の過程を確認するとともに、今後のさらなる国際化の可能性について探ることとする。北海道大樹町発の「ニュースポーツ」が、海外では北海道や日本国内の普及展開とは異なる位相で拡大しつつある。現時点において、ミニバレー普及の国際化を時系列かつ即時的に整理することが、ニュースポーツとして普及・拡大するうえでの今後の貴重な資料となることが予想される。

1. ミニバレー40 周年記念誌「挑戦～であい・ふれあい・わかちあい」をもとにしたミニバレーの国際交流の歴史

本章では、ミニバレーの国際交流の歴史を「ミニバレー40 周年記念誌『挑戦～であい・ふれあい・わかちあい』(以下、「40 周年記念誌」とする)」（2016）をもとに確認する。現在、「40 周年記念誌」の発刊から数年が経過しているため、その後の交流の様相についても一部付記する。第 1 節では、ミニバレーの国際交流が始まった経緯、ミニバレージャパンカップなどの大会に出場していた外国人の数などを整理する。第 2 節では、日本と国際交流でつながっている主な国々と、その交流が開始された経緯などを中心に紹介する。第 3 節では、その中でも現在、とりわけ太いパイプで協定締結、相互交流が行われているロシア（特にサハリン州）との交流の経緯を整理する。

1-1. ミニバレーの国際交流前史

ミニバレーの国際交流は、1990 年にブラジルの日本人学校から帰国した幕別町の Y 夫妻が、帯広畜産大学の学生を招いて「世界に広げようミニバレーの会」を企画したことに始まる。その時、Y 夫妻が小島氏らを大会に招いた。小島氏は、「日本人が楽しいことは、外国人にとっても同じだ」と考えを新たにし、ミニバレーの国際交流に取り組む契機となった。

1992 年の第 5 回ジャパンカップにおいて、1 名以上の外国人を加えたチーム編成をルールとした「インターナショナルの部」を創設した。しかしながら、その後 5 年間は空白の時期を迎える。第 12 回ジャパンカップ～第 20 回ジャパンカップまでは、数か国の参加が見られたものの、第 20 回、24 回大会などでは海外からの「招聘チーム」による参加のみとなっている（表 1）。参加国数が二桁の時期のインターナショナルの部には、北海道大学などに留学していた札幌圏の大学生や、JICA（独立行政法人国際協力機構）の研修生などが参加していた。

表 1 ミニバレーのジャパンカップの海外からの参加国数

年 度	回	開催地	参加国数	備 考
1992	5	大樹	7	インターナショナルの部創設
1993～1998 年（第 6 回～11 回）				参加チームなし
2000	12	札幌	4	

2001	13	札幌	12	
2002	14	札幌	12	
2003	15	札幌	12	
2004	16	オホーツク圏	5	
2005	17	札幌	15	
2006	18	恵庭	12	
2007	19	札幌	4	
2008	20	大樹	4	招聘チーム 2 チーム 10 名
2009～2011（第 21 回～23 回）募集せず				
2012	24	札幌	2	ロシア（サハリン、ブリヤート） モンゴルの合同チーム 11 名、

また、1994 年から始まった「読売杯北海道 155 ミニバレー大会」には、JICA の研修生が多数参加していた時期も見られた。しかしながら、JICA 側の事情もあり、近年では外国人の参加が見られなくなっている。

1－2. 国際交流でつながっている主な国々

ミニバレーの国際交流が始まる契機は、主に①個人からの小島氏への照会、問い合わせ、②大学、研究者による学術交流、③公的機関を通じたものの 3 つに分類される。その後、日本人による現地指導、大会参加などへと発展する事例も少なくない。

①小島氏への照会から始まったつながり（フィリピン）

ミニバレーの国際交流のはじまりは、フィリピンとの交流であった。2002 年 7 月、フィリピンに在住していた NGO 職員の日本人から小島氏に指導要請があった。その主旨は「フィリピンでは女性のためのスポーツが少ない。女性や高齢者の心と体の健康のためにミニバレーを普及したい。そのため審判の養成が急務であるので、審判養成のために協力してほしい」というものであった。フィリピンの NGO 職員は、日本におけるミニバレー人気をみて、自身でボールを購入し、フィリピンで試行している中での問い合わせであった。その後、2004 年 2 月から小島氏をはじめとする 5 名の訪問団をフィリピンに派遣し、普及活動を行った。指導者講習会のほか、孤児院でのデモンストレーションや大会への参加なども行っている。また、フィリピンとの交流は、在日フィリピン人を通じたものも少なくなく、札幌市や埼玉県などでミニバレーを通じた交流が進展している。

②大学、研究者による学術交流から始まったつながり（ロシア、中国、カナダ、モンゴル）

前述したように、2002 年、北海道大学において「北東ユーラシア地域健康・体育・スポーツ会議」が開催され、それぞれの地域から、寒冷環境を克服し、身体活動、健康増進を通して地域発展を目指す研究成果が発表された。この学術会議には、日本、韓国、ロシア、中国の大学関係者が参加していた。

ロシア・サハリン州との交流は後述するが、他にも南京師範大学、ハルビン大学から来日した中国の研究者らは、発表後直ちにミニバレーの実施状況を視察し、帰国した。

また、北海道と姉妹関係にあるカナダ・アルバータ州は、毎年スポーツ交流事業を実施している。その一環で 2002 年にカナダを訪問した研究者（当時、全日本ミニバレー協会役員）によって、カルガリーにおいてミニバレーのデモンストレーションが行われた。その後、2004 年にアルバータ州からの訪問団が来日した際には、札幌のミニバレージャパンカップ会場を視察した。

2012 年には、ミニバレー誕生 40 周年記念事業として「ロシア・サハリン交流 10 周年記念事業」を実施した。ロシアの研究者との情報交換を通じて、そのシンポジウムへの参加を強く希望したのが、モンゴル体育学研究所のジャムツツ所長であった。彼は帰国後、ロシアの研究者と連携を図り、教員や学生向けのミニバレー大会を企画するなど草の根的な活動を広げ、その後モンゴルミニバレー協会を立ち上げ、今後の普及のための体制づくりを整えている。

③公的機関を通じたつながり（韓国、その他の国々の人）

近年、積極的にミニバレーの普及をはかっている国の 1 つが韓国である。2012 年から、HIECC（公益財団法人国際交流・協力総合支援センター）が、高齢者の社会参加を促進し、韓国との国際交流のモデル事業とする「日韓新時代モデル創出事業」をスタートさせた。その中で、韓国へ紹介するスポーツとしてミニバレーとパークゴルフが選出され、慶尚南道やソウル特別市でデモンストレーションゲームが行われた。このモデル事業への選定を契機として、韓国とのミニバレー交流がはじまった。2013 年には韓国昌原（チャンウォン）市の一行が、ミニバレーとパークゴルフの視察のため北海道を訪れ、2014 年には小島氏をはじめとする日本人 9 名が昌原市を訪問した。同年 11 月には、HIECC の立会のもと、慶尚南道バレーボール協会と北海道ミニバレー協会の間で「交流覚書」の調印が行われた。2016 年には、日本の訪問団が韓国慶尚南道を訪ずれ、その年に韓国の訪問団が第 28 回ジャパンカップに参加している。2018 年 11 月には、慶尚南道から 8 名が来日し、札幌市で開催されたミニバレージャパンカップに参加した。大会前日には、ミニバレーの審判技術や、普及のための基礎知識を学ぶため、「B 級公認審判員認定講習会」が開催され、訪問団全員が受講した。

また、帯広 JICA では、毎月 1 回例会があり、その中で地域住民を交えたミニバレー交流が行われている。アメリカ、カナダなどの欧米以外にも、アジアやアフリカの小国から参加している人もおり、ミニバレーを通じた国際交流がなされている。

1-3. 太いパイプでつながったロシア

ミニバレーは上述したように世界中の人々によってプレーされ、さらなる普及がなされようとしている。その中でも現在最も頻繁、かつ定期的、継続的な交流がなされているのは、ロシア（特にサハリン州）である。前述したように、2002 年に北海道大学で開催された「北東ユーラシア地域健康・体育・スポーツ会議」において、小島氏の説明のもと「ミニバレーによる健康づくりの推進と地域振興～30 年の挑戦～」と題し、実践発表が行われた。この「30 年にわたる活動実践」に大きな刺激を受けたのが、サハリン国立総合大学のパシュコフ教授であった。パシュコフ教授は、ミニバレーを「だれでも、手軽にできる寒冷地向きのスポーツ」と評価し、翌年 2003 年から学生らとともに普及の準備

を開始した。

2005 年、小島氏がサハリン国立大学から招聘され、「第 1 次ロシア訪問（サハリン）」が行われた。この時、ルールと審判法の普及をはじめ、ロシアと日本の学術交流を目的としたセミナーも実施された。その後の交流においては、小島氏とサハリン国立総合大学のパシュコフ教授による連携、交流が重要な役割を果たしている。ロシア国内各地域のキーパーソンへの橋渡し役をパシュコフ教授が担ったことにより、ロシア・サハリン州から普及をスタートさせたミニバレーは、ロシア全土に普及されている。

日本側からの訪問団によるロシア訪問は、2006 年（サハリン）、2009 年（ハバロフスク、サハリン）、2010 年（サハリン）、2012 年（サハリン）、2014 年（ブリヤート共和国ウランウデ）、2016 年（ウラジミール）、2017 年（ソチ、サハリン）など定期的な交流が行われている。他にも小島氏は、2012 年にサンクトペテルブルクで開催された「第 5 回人間・健康・スポーツ国際会議」においてパシュコフ教授と連名で学術発表をしている。また、2016 年にはウラジミールを訪問している。ロシア側の受入も 2007、2008、2012、2016、2018 年に行われた。特に、2016 年の第 28 回ジャパンカップ（帯広）には、ロシアのサハリン、ウラウンデ、モスクワ、クラスノヤルスクの選手団受入を実施している。

なお、2012 年 10 月に、北海道ミニバレー協会とサハリンバレーボール連盟との間で「協力協定書」を交わしている。

2. ロシア・サハリン州におけるフィールドワークから

2-1. フィールドワークの概要

筆者は 2017 年 10 月 16 日から 23 日の 6 泊 7 日でロシア・サハリン州を訪問した。その滞在スケジュールは、表 2 の通りである。滞在は、ユジノサハリンスク市をベースに、南部のコルサコフ市、アニワ村、西部のネベリスク市などの訪問に帯同した。以下では、①幼児、障がい者によるミニバレー活動の紹介、②パシュコフ教授へのインタビュー調査の 2 点について記述する。なお、筆者はロシア語に精通していないため、現地でのコミュニケーションには、すべてサハリン国立総合大学の教員、および東洋学部日本語学科 2 名の女子学生による通訳（ロシア語⇄日本語）を介している。

ここでロシアの教育制度を確認しておきたい。外務省のホームページを参照したところ、ロシアの教育は、大きく「普通教育」と「専門教育」に分かれている。普通教育は「4-5-2 制」であり、この期間は義務教育である。「初等・中等教育は 6 歳から 17 歳が対象」で、「保護者の希望により 7 歳から開始することも可能」とされる。

筆者らが邦訳で「幼稚園」と呼ぶものは、ロシアにおいては「就学前教育」とされる。外務省のホームページによると、「法律上は、満 2 か月以上の子供であれば就学前教育を受けることが可能」と規定されている（ロシア連邦における教育に関する連邦法第 67 条第 1 項第 1 文）。一般的には、おおむね満 2 歳以上 6.5 歳未満の子供が就学前教育を受けている」とされる。このため日本の学校制度に置き換えてみると、「幼稚園～小学 2 年生相当」の幼児、児童が就学前教育の対象となる。本稿においては、義務教育前の段階ということで「幼稚園」、「幼児」で語法を統一し、以下の論考を進める。

表2 筆者らによるロシア滞在スケジュール

16日	新千歳空港→ユジノサハリンスクへ移動
17日	幼児のミニバレー大会視察, サハリン国立総合大学において学術シンポジウム(写真2~4)
18日	ユジノサハリンスク幼稚園訪問 表敬訪問(サハリン州スポーツ・青少年政策省大臣) アニワ地区トロイツキー村訪問(公民館, 小学校訪問)
19日	コルサコフ訪問(市長表敬, 高齢者とミニバレーのゲーム, 幼稚園訪問)
20日	ネベリスク訪問(副市長表敬, セミナー, ミニバレーゲーム交流)
21日	大学生のミニバレー大会視察 パシュコフ教授, 小島氏, 筆者で情報交換(ガガーリンホテル)
22日	ミニバレー大会(ユジノサハリンスクにおいて)
23日	ユジノサハリンスク→新千歳空港



写真2 学術シンポジウムにおける筆者の発表スライドの表紙

シンポジウムにおける発表から

表2にあるように、2017年10月17日開催のサハリン国立総合大学における学術シンポジウム
「Симпозиум для учителей физической культуры педагогического образования (幼児の体育

教育インストラクターのためのシンポジウム)」が行われた。このシンポジウムは、サハリン州における未就学児（幼児）を対象としたミニバレー振興「友好のボールプロジェクト」2012～2017年における5年間の成果を検証し、今後の振興の道筋を検討するものであった。シンポジウムでは、パシュコフ教授、小島氏や、筆者が発表した（Игровые программы воспитания японских детей：日本の子どものゲームプログラムについて、写真2）。上述の3名以外にも、幼児教育の現場でミニバレー指導をしている教職員による発表も行われた。①未就学児児童のミニバレーと身体的成長、②未就学児のコミュニケーション手段発達におけるミニバレーの影響、③未就学児童の新しい身体的成長を促す学校と保護者の協力、④7歳から8歳児の子ども公式バレーボールに果たすミニバレーの役割、⑤ポロナISKのミニバレーの5題であった。⑤のポロナISKの教員による発表では、幼児へのミニバレーの実施においてコートやネットの高さをアレンジして取り組んでいる事例、ミニバレーを幼稚園で取り入れてから有病率が低下した（15%から7%に）り、通学率が70%から80%に向上した事例などが報告された（写真3、写真4）。



写真3 サハリン国立総合大学において開催された学術シンポジウムの様子

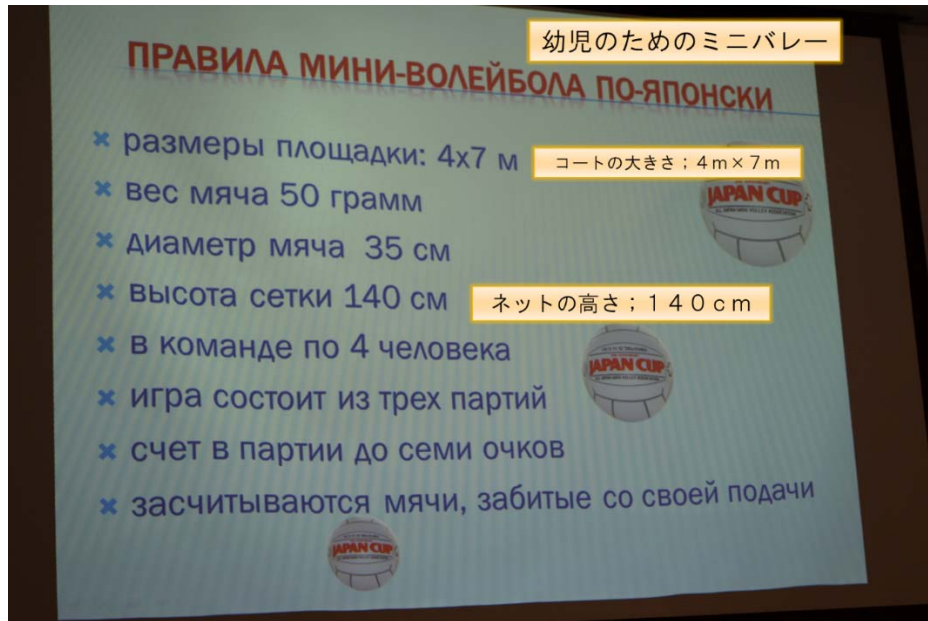


写真4 幼児用にアレンジされたミニバレーのルール（日本語訳は筆者によるもの）

2-2. 幼児，障がい者によるミニバレーの様子の紹介

本項では，ロシアにおけるミニバレーの現状の中でも，その普及のスピードが著しい幼児を中心に扱う．また，項末では障がい者への普及についても言及する．

北海道においては，ミニバレーはある程度普及・発展し，現在は小学校の授業，PTAのレクリエーション，町内会のレクリエーションなどで手軽にできるスポーツとして親しまれている．ところが，ロシアでは各幼稚園の授業や，幼児向けの大会が開催されるなど，考案者の小島氏も「嬉しいことに，幼児へあれほどまでに普及しているとは思わなかった」と述べていた．

幼児向けのミニバレー大会の様子

筆者らは，2017年10月18日に幼児向けのミニバレー大会を視察した．とりわけ①開会や閉会のセレモニー（式典）をきちんと行うこと，②ミニバレー体操を実施すること，③教師による徹底したコーチング（指導）などが特徴的であった．また前述（写真4を提示）したように，ミニバレーのルールは幼児用にネットの高さや，コートサイズをアレンジしている．

①，③については，ロシアにおける教育的方針が垣間見えた．今日の日本では，幼児に対して規律，ルールの順守を徹底することはほとんどない．また，運動会における徒競走の順位付けの廃止に見られるように，日本では幼少期の過度な競争を嫌う傾向にある．しかしながら，ロシアのセレモニーでは一糸乱れぬ整列，試合中は教師が大声で指導するなど日本の幼児体育においては見ることもできないものであった（写真5，6）．



写真5 セレモニー前の整列指導をしている教師の様子



写真6 幼児のミニバレーの大会の様子と厳しく指導する教師

②の「ミニバレー体操」は、我が国には無いものであった。ボールエクササイズをミニバレー風にアレンジしたものであった。ミニバレーのボールを一人ひとつ持ち、音楽に合わせて簡単なストレッチを行うのであるが、先生の見本を見ながら幼児は笑顔で取り組んでいた（写真7, 8）。

幼児向けのミニバレー大会では、7チームによる試合が行われ、その審判はサハリン国立総合大学の学生が行っていた。幼児でも楽しめるようにアレンジされたコートであったが、サーブで決まるケースや、ボールを1回で返す場合が多いなど、戦術的な内容の工夫や関係プレーはほとんど見られなかった（写真9, 10）。



写真7 大会前にミニバレー体操をする幼児たち



写真8 幼稚園でのミニバレー体操の様子（大会会場にあった写真より）



写真 9 ミニバレーの大会の様子 男児による力強いサーブ



写真 10 大会関係者による記念撮影

サハリン州の幼稚園視察の様子

筆者らは、訪問第 3, 4 日目の 10 月 18, 19 日に、ユジノサハリンスク、コルサコフの幼稚園を視察した。ここでは、我が国でいうところの「多目的室」のようなところでミニバレーが行われていた。サハリンでは、各学校に「体育館」のような施設が十分に整備されておらず、天井の低い、梁がむき出しの室内でミニバレーを実施していた（写真 11）。またネットの高さを大人の肩（140 cm、正規ルールは 155 cm）に下げ、幼児でもプレーが楽しめるように工夫されていた。特に、コルサコフの幼

稚園では、床にテープで「×」の目印をつけ、幼児にポジションを教えている様子であった。筆者も彼らとプレーしたが、すぐに天井に当たってしまい、大人ではラリーを続けることが困難であった（写真 12, 13）。



写真 11 ユジノサハリンスクの幼稚園における運動環境（天井の梁が見えている）



写真 12 コルサコフの幼稚園におけるミニバレー（床に「×印」が見えている）



写真 13 コルサコフの幼稚園におけるミニバレーの様子を見守る小島氏

サハリン州の障がい者によるミニバレーの様子

ここまでは、幼児へのミニバレー普及についてみてきたが、以降は、ミニバレーが障がい者へ普及されている様子について記述する。

全日本ミニバレー協会役員にも、隻腕（片腕切断）の現役プレイヤーがいる。彼は、2012 年に訪露し、その際に現地住民との試合でプレーをしている。小島氏によると、「最初は壁際で黙って見ていた障がいをもつロシア人たちが、（隻腕の）彼のプレーを見たあと、目の色を変えていた。彼の帰国後、彼らもミニバレーをプレーするようになったのではないかと語っている。今では、ミニバレーの大会に、肢体不自由者のほか、脳性麻痺などの知的障がい者、ろうあ者など様々な障がいを持つ者たちが参加している。ミニバレーの大会に「障がい者部門」を設けプレーしている姿は、我が国では沖縄大会で行われているものの数少ない光景であった（写真 14、15）。



写真 14 肢体不自由者らによるミニバレーの様子（コルサコフの体育館）



写真 15 ミニバレー大会の様子（白いTシャツチームの左胸には車いすをデザインしたチームマーク，紫色の女性はろうあ者）

2-3. パシュコフ教授へのインタビュー調査

本項では、ロシア・サハリン州におけるミニバレー普及の仕掛け人でもある、サハリン国立総合大学パシュコフ教授へのインタビュー調査について記載する。

パシュコフ教授へのインタビュー調査は、2017年10月21日にユジノサハリンスク市内ホテルの一室において、90分間実施した。インタビュー調査には、小島氏も同席し、通訳はサハリン国立総合大学において日本語を専攻している女子学生が担当した。得られた音声データの分析に際しては、筆者がロシア語に精通していないため、通訳による日本語訳のみを採用した。

2-3-1. ロシア・サハリン州の幼稚園における現状と幼児への普及の意図

パシュコフ教授によると、ユジノサハリンスクでは「56の幼稚園うち30の幼稚園」でミニバレーが実施されているという。他にも「(大会などに)参加するだけ、準備と参加するだけの幼稚園があり」、「ドリンスク、コルサコフ2、ネベリスク3、アニワ1、ドルムスク、ホルムスク、ポロナイスク、バツフル、アレキサンドロフサハリンスキー、オハなど」で実施されている。「サハリン州全体では、合計すると40くらい」の幼稚園で実施されているという。逆に普及が円滑に進まない要因は、「指導をする先生がいない、ボールがない、興味がない人」、など「結局、人の問題。恵まれた環境が必要」であるという。

はじめに、「幼児にミニバレー取り入れた理由」はとの筆者の質問に対し、パシュコフ教授は「ミニバレーが好きだから勧めた」という。特に、「ゲームが好きであるということは、生活の上で大事なことで」、また「ゲームから学ぶことは多い」という。特にミニバレーの持つ機能として、「①教育、②コ

コミュニケーション能力、③認識力」の3つがあげられるという。例えば、心理学的な因子として「最初は悲しそうでも、(ミニバレーを開始したら)10分後にはよくなる」ことがある。「幼稚園に入ると、スポーツについての概念(学習指導要領的なもの?)があります」、さらに「ミニバレーはいろいろな機能があります。教育とか、コミュニケーション、ルールを覚える、ゲームのことを考えるなどの認識力、(榮譽、満足感などの自己充足感を得る)心理的な要因もある」という。このように「心理学的因子、気持ちが悪い(落ち込んでいる)、感情的、火曜日に幼稚園の子どもをみて悲しそうでしたが、ミニバレーゲームを実施したことで(子どもたちの表情が)とてもよくなりました」ということが見られるとのことである。

幼児の特性として、「幼稚園の子どもたちはゲームをすることが大好きで、ゲームをしていろいろなことを学びます」、「幼稚園ではいろいろな(教育)プログラムをすることが多いけど、ミニバレーは、スポーツとゲームなので活動が広がります。プロフェッショナルじゃなくても賞状、カップがもらえます」という。この「子どもたちはゲームをすることが好きで」というところは、後述のパシュコフ教授の会話がさらに裏付けとなる。「ロシアでボールゲームは人気がある。昔からボールゲームは人気があった。(例えば)バスケットボール、サッカー、バレーボール」がある。子どもたちは、「テニスボール、重いボールを使ってバレーボールをやっていた」ものの、「特別なゲームがなかった」という。「昔は、バレーボールをするため、7歳から特別な学校に入った。(しかしながら)ミニバレーは5歳から始められる」という。

次に、「なぜ、ここまでミニバレーがサハリンで普及した(広まった)のか」について質問した。すると、「①日本に対する関心が強い、②日本のゲームだから関心が強い、③ミニバレーを知って日本の文化を伝える」ことの3つをあげていた。中には、サハリン国立総合大学に入学し、授業でミニバレーを体験して、その後、日本の大学に留学する学生もいるという。

これほどまでにロシア・サハリン州でミニバレーが普及した要因として、「ミニバレー以前には(テニス、バレーボールはあったが、幼児向けの)特別なゲームはなかった」という。このように、ミニバレーに代わる他のスポーツ、健康スポーツが幼児に導入されておらず、この点がロシア・サハリン州において普及する要因の1つと推察される。

他にも、2002年に北海道の学術会議に参加していたパシュコフ教授のキーパーソンとしての役割も大きい。彼は体育学の教員の立場で、学生にミニバレーを普及することが可能であった。彼も「体育教育、体育、サハリン州全土で学生たちが働いているから(ミニバレーの普及が)可能だった」という。そして、2017年10月のシンポジウムで現職の幼稚園教諭が発表していたスライド(写真4)のルールは、「パシュコフ先生が、今の幼児のルールについて考えた」という。ルールをアレンジするにあたり、「子どもたちをみて、最適なネットの高さを選んだ」という。

以上の点を踏まえ、さらにパシュコフ教授は、ロシア・サハリン州は、日本と国境を接していることもあり、「サハリンでは日本に興味がある、(そのため)ミニバレーや、ミニバレーの興味が深くなる、(さらには)日本とロシアの関係がよくなる、ミニバレーをして日本の文化を伝える、そのあと子どもたちは、日本と日本文化に興味をもって留学して、そのあと、それは(ミニバレー)は、友好のボールとなる」と述べる。パシュコフ教授によると、「ミニバレーを広げるため、先生(パシュコフ教授)は長い時間を費やした、そして先生(パシュコフ教授)だけでなく、卒業生もミニバレーを広

めてきた」という。また、「ロシア全土で他の大学の研究者にミニバレーについて科学的な側面から人々に（情報）提供する」ということを考えている。さらに、最近ではササルタンという幼稚園でミニバレーが始まり、「今後はミニバレーはいろいろな地域で成長（普及発展）します。ミニバレーは日本とロシアの友好の基礎となっている」とのことであった。

2-3-2. ロシア・サハリン州における課題と展望

上述のように、ロシア・サハリン州では、パシュコフ教授をキーパーソンとして、ここ 15 年程度で急速なミニバレーの普及がなされてきた。同時に、3 つの主要な課題がある。

第 1 に「天井の高い体育館などの環境面の充実」である。写真で示したように、ロシア・サハリン州では、我が国の「多目的室」のようなところでミニバレーを実施していた。こうした環境が変わることが必要であり、その結果「子どもたちは、強くサーブすることができる」という。また、「天井が低いことによる練習の戸惑い」が見られるなど、幼稚園の実施環境には多くの問題があると考えているとのことであった。

第 2 に、「教育プログラムの問題」である。パシュコフ教授は、「一本のプログラムがあれば、スポーツのプログラムがもっと豊かになる」という。この背景には、「個々人の教師の力量に左右される」、「指導と評価、一体となるようなものが必要」、「世界的な指導のスタンダード（標準、基準）が必要となる」、「ミニバレーのルールについてとか、世界的な指導書的なものが必要」と述べる。その実現に向け、日本のミニバレーの指導者と共同執筆の提案がなされている。

第 3 に、「大学での仕事があって、（ミニバレーに割ける時間がない）」とのことである。「ミニバレーを成長させるためには時間がかかる」ため、そのために必要な「お金、指導のサポートのチェンジ」が必要であるという。こうしたことを実現するためには、「大事な問題は自分のイニシアティブだけ」と考えている。

今後の展望としてパシュコフ教授は、「ミニバレーのプロジェクトは今後も成長する、人々はミニバレーに興味があり、指導にも興味がある、事務所（公的機関など）のサポートもある」という。さらには、「ミニバレーの科学的な成果（エビデンス）は見られる」としている。今後もミニバレーは、「普通（公式）のバレーボールとともにロシアと世界中に広がっていくと思います。そのうち（ミニバレーの）学校ができるかもしれません」という。さらなるのステップへと進むためには、「学術的な会議（カンファレンス）」や、「いろいろな記事とかポスター、スタンダード（統一的なルール、指導方法）も必要」であり、「新しい先生へ教えることも必要」とあるという。

おわりに

冒頭にも記述したように、本稿の目的はミニバレーの国際化、とりわけロシア・サハリン州における幼児や、障がい者への普及状況の確認（調査）をもとに、今後のさらなる国際化の可能性について探ることであった。北海道大樹町発のミニバレーが、北海道、日本国内の普及展開とは異なる位相で拡大しつつある現段階において、その国際化を時系列かつ即時的に整理することを主眼としていた。

第 1 に、ミニバレーの国際化という視点で見ると、現段階では、ロシアで最も普及、拡大している点について異論はないであろう。今後もロシア全土に拡大し、年齢層も幼稚園児から高齢者まで

幅広く、生涯スポーツの1つとして根付いていきそうな勢いが見られる。また、韓国においても、日本との相互交流や、ミニバレー連盟の組織化や、韓国初のミニバレー大会が開催されるなど、今後の普及、発展の可能性が期待される。その一方で、普及のためのキーパーソンの欠如、つながりが断ち切れてしまった、現地のインフラの問題など思うように普及が進展していない国や地域も見られる。これがミニバレーの国際化における現状であり、普及が成功した国々のみではないことについては言及しておきたい。

第2に、ミニバレーの国際化が成功しつつある、ロシアを事例に2点ほど考察する。ロシア・サハリン州で普及した1つ目の要因は、「ロシア人のニーズに適合した」ためである。ロシアでは、1) 元々ロシア人の多くがボールゲームを好きである点、2) 幼児期から楽しめるボールゲームがほとんど無かった点、3) 経済発展に伴い、競技スポーツ以外の身体活動にも目が向けられ、健康意識や余暇活動としてのスポーツの視点が芽生えた点、4) 冬期に楽しめるスポーツが少ない点、これらの複合的な要因の特効薬としてミニバレーは急速に普及、拡大していったものと推察される。

ロシア・サハリン州で普及した2つ目の要因は、キーパーソンとしてのパシュコフ教授の存在である。ロシアでは、「教授」職に対する社会的地位が高く、その社会的影響力はとても大きいものとされる。実際にサハリンでは、パシュコフ教授の一声で、現役の学生、教え子などを通じてわずか15年で、ミニバレーを浸透させることに成功した。また、彼の持つ学術ネットワークを駆使し、バイカル、モスクワ、ウラジミール、ブリヤート、クラスノヤルスク、ソチなどで次々にミニバレー大会が開催されている。

このように考えてみると、ロシアにおけるミニバレーの普及は、1972年当時の北海道と状況が類似しているものと推察される。1972年に小島氏のもと考案されたミニバレーは、彼の強力なリーダーシップにより、北海道各地のキーパーソンへと飛び火し、その後各地で実践され普及、拡大していった。また、住民たちに受け入れられた土壌は、農閑期の十勝地方における「冬場の健康スポーツ」という地域課題に合致したものであった。現在のロシアでも同じように、「冬場の運動不足解消」という地域課題と、その課題に上手くマッチングさせたパシュコフ教授をはじめとするキーパーソンの存在が極めて大きいものと推察される。前述したように、パシュコフ教授は2002年の小島氏の発表の聴講に際して、「地域振興」の側面にも着目していたことから、このような現在の形を思い描いていた可能性を否定できない。一方で、ミニバレーの国際化により新たな局面が垣間見えたのは、ロシアに輸入されたミニバレーが、ロシア側の論理や、パシュコフ教授によるアレンジが加えられ、幼児や障がい者へと普及、拡大されている点である。「幼児向けのボールプログラムが無かった」というロシア側の課題に合致した結果ともいえるが、ルールや規律を覚えるのが難しい幼児期に、スポーツ的要素を教育できるのはロシア独自の教育システム、教授システムによる影響もあると推察される。

第3に、ミニバレーの国際化に備えた日本側の課題、問題である。1つは、先の「40周年記念誌」からの引用となるが、この中では①「組織の国際化対応」、②「外国語ルールブック作成の支援」、③「指導者づくりとボールの販路確保」の3点があげられている。現在、相互交流が進み、選手団が往来するようになった際、問題となるのが①の「組織の国際化対応」である。元々十勝地方の小さな町からスタートしたミニバレーは、現在のようなグローバル化を見据えていたわけではない。2002年以降、急速に拡大しているミニバレーの現状に、小島氏をはじめとする協会員たちが四苦八苦している

ものと推察される。特に、ロシア、韓国から来る訪問団や選手は、英語が通じないことも多く、意思疎通が可能な共通言語が見当たらない。通訳を依頼する費用なども勘案すると、十分な受け入れ態勢の構築が急務である。

第4に、我が国のミニバレー人口の空洞化とどのように向き合うかである。前述したように、ミニバレーの知名度は、北海道内ではかなり高く、多くの北海道民に「ミニバレー＝白いビニールボール」と理解されているものと推察される。しかしながら、一般社団法人全日本ミニバレー協会、およびその下部組織への登録者数は、横ばいか、むしろ減少傾向にある。ミニバレーがどこでも、当たり前になるようになった反作用ともいえるが、協会登録者数、地域、地区の協会の消滅という現実がないわけではない。よって、ミニバレーは今後もロシアをはじめとするグローバル化の進展と、それを支える国内のミニバレー組織の維持という2つを両輪としていかなければならないものと推察される。

ここで、本稿の限界と研究課題についてである。本稿では、ミニバレーの国際化を時系列かつ即自的に整理することを主眼としていた。本稿の限界の1つ目は、筆者がロシア語に精通していないことから、その多くは通訳や翻訳ソフト（Google 翻訳）などの力を借りなければならず、正確なニュアンスの把握には疑念の余地がないわけではない。そのような背景もあり、写真を中心にフィールドワークのよって得られた「事実」を即自的に報告することのみとした。よって、幼児体育や、体育社会学的な視角からの理論的な検討は後段に譲ることとする。

最後に、今後の研究課題を3つあげる。第1に、前述したようにパシュコフ教授は「Физическая культура. Мини волейбол」を執筆し、その日本語の翻訳作業が待たれるところである。彼の著書と日本の研究者が議論を積み重ねることにより、ミニバレーの国際化を担いうる新たな学術的知見が見出されるものと推察される。第2に、本研究のフィールドワーク、参与観察をさらに継続し、北海道発のミニバレーが国際化されていく現状をリアルに記述することで、新たな学術的価値を提供できるものと推察される。第3に、ロシア・サハリン州を対象とした国内外の研究との比較である。例えば、須田力編著（1998）による『北方圏住民のスポーツ』において、「サハリン州住民の体育・スポーツ」が報告されている。このように、ロシア・サハリン州を対象とした体育学的な研究の蓄積も一定程度見ることができる。本研究では、ミニバレーの国際化に焦点を当てているが、今後はこれら先行研究との詳細な比較、考察を実施することにより、新たな知見が見いだされるものと期待する。以上の3つを今後の研究課題とし、本稿を結ぶ。

●謝 辞

本稿の執筆に当たり、一般社団法人全日本ミニバレー協会会長の小島秀俊氏には多大なるご協力、ご教授、ご指摘を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。また、一般社団法人全日本ミニバレー協会、ロシア・サハリン国立総合大学のパシュコフ教授、サハリン国立総合大学の学生たち、サハリンバレーボール連盟の皆さまにもご協力をいただきました。ありがとうございました。最後にこの場をお借りして、筆者が北海道大樹町に生を享けた時から、ミニバレーを通じ「であい、ふれあい、わかちあい」をさせていただきましたすべての皆様に御礼、感謝申し上げます。

●参考文献

- 中央教育審議会, 1971, 「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について (答申)」 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/1309492.htm
外務省, 「諸外国・地域の学校情報」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC55200.html
保健体育審議会, 1972, 「体育・スポーツの普及振興に関する基本的方策について (答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314680.htm
小島秀俊, 1983, 「痛くないバレーボールの指導 ―ビーチボールのミニバレー―」, 『学校体育』 36 (7) : 39-43.
小島秀俊, 1982, 「地域スポーツに生きづく高齢者」, 『健康と体力』 14 (9) : 28-30.
長屋昭義, 鈴木一央, 三好洋二, 1987, 「農民の生活とスポーツ―北海道大樹町石坂地区酪農農民の事例―」, 体育・スポーツ社会学研究編, 『体育・スポーツ社会学研究 6』, 道和書院 : 171-193.
野々宮徹, 1993, 「ニュースポーツへの接近」, 野々宮徹=研究代表, 『ニュースポーツとは何か ―そのスポーツ史的研究(水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書 平成4年度)』, ニュースポーツ研究会, 名古屋 : 3-16.
仲野隆士, 2006, 「ニュースポーツの人口動態」, 『体育の科学』 56 (5) : 361-365.
Peter Nikolaevich Pasyukov (Петр Николаевич Пасюков), 2018, PHYSICAL CULTURE. MINI-VOLLEYBALL Manual for physical education instructor of preschool educational Format (ФИЗИЧЕСКАЯ КУЛЬТУРА. Мини-волейбол Пособие для инструктора по физическому воспитанию дошкольного образования Формат), Institute for the Development of Education of the Sakhalin (Yuzhno-Sakhalinsk).
大沼義彦, 1996, 「北海道における地域スポーツの検討」, 『北海道大学教育学部紀要』 71 : 197-208.
大沼義彦, 1998, 「北海道の地域スポーツ」, 須田力=編著『北方圏住民の生活とスポーツ』, 共同文化社, 札幌 : 133-178.
笹瀬雅史, 1992, 「地域に根ざす生涯スポーツの展開と動向」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』 15 : 14-30.
須田力=編著, 1998, 『北方圏住民の生活とスポーツ』, 共同文化社, 札幌.
社会教育審議会, 1971, 「急激な社会構造の変化に対処する社会教育のあり方について―答申―」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318428.htm
十勝ミニバレー協会, 1997, 「十勝ミニバレー協会創立 10 周年記念誌」, 十勝ミニバレー協会創立 10 周年記念実行委員会, 『十勝ミニバレー協会創立 10 周年記念誌』
佐美靖, 黒澤奈緒, 2003, 「ミニバレーの運動特性と健康増進効果」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』 88 : 221-234.
大樹町ミニバレー協会, 2006, 「大樹ミニバレー協会創立 20 周年記念誌」, 大樹町ミニバレー協会創立 20 周年記念実行委員会『大樹ミニバレー協会創立 20 周年記念誌』, 大樹町ミニバレー協会 : 9.
全日本ミニバレー協会公認審判員認定委員会=監修, 全日本ミニバレー協会=編, 2004, 『オフィシャル・ミニバレー・ルールブック 2004 年改訂版』, 全日本ミニバレー協会, 大樹町.

全日本ミニバレー協会・北海道ミニバレー協会，2016，小島秀俊＝編著『ミニバレー誕生 40 周年記念誌－挑戦－ ～であい・ふれあい・わかちあい～』，「ミニバレー誕生 40 周年記念誌」出版委員会（大樹町）．

● 英文タイトル

Popularization of young children and people with disabilities by internationalization of mini-volleyball

～ Based on the case of Sakhalin(Russia) province ～

● 英文要約

The Mini-volleyball, which was created in Taiki Town, Hokkaido in 1972, is one of the familiar "New Sports" in Hokkaido. About 40 years have passed since the birth of Mini-volleyball, now it has spread to more than 40 countries around the world, especially players are expanding rapidly in Russia.

Therefore, the purpose of this paper is to investigate the process of internationalization of Mini-volleyball, especially the young children and people with disabled in Sakhalin (Russia), and to explore the possibility of further internationalization in the future. "New Sports" from Hokkaido (Taiki Town) is expanding overseas in a different phase from the spreading in Hokkaido or Japan. It is expected that the present time series and instantaneous organization of internationalization of Mini-volleyball are valuable materials for spreading and expanding as new sports in the future.

● 英文キーワード

Mini-volleyball, young children, people with disabilities, Sakhalin, New Sports